哲學研究　第四百二十六號　第三十七卷第四冊

# 推論の三つの型（アリストテレス）

山内得立

## 一

アリストテレスは推論について三の型を區別する。第一は最も代表的なる推論であつて、三の概念があり、その最後のものが中間的なる概念の中に含まれ、中間的なるものが第一の概念の中に包まれることによつて成立つところの推論である。例えばAが凡てのBによりて賓辭づけられ、BがCによつて賓辭づけられるならばAは凡てのCによつて賓辭づけられねばならない。この型はBarbaraと名づけられる。同様にAが如何なるBによつても賓辭づけられず、Bが凡てのCによつて賓辭づけられるならば、如何なるCもAと同一とはならぬであらう。これはCelarentと名づけられる。次に凡てのBがAに等しく、或るCがBに等しければ或るCはAに等しい、これはDariiと呼ばれる。また如何なるBもAに等しくなく、或るCがBに等しければ或るCはAと等しくない。これはFerioと名づけられる。

推論の第二の型は次の如くである。同一の事物が一つの事柄の凡てに屬し、他の凡てに屬しないならば、一つの事柄は他の事柄と等しくない。例えばMがOに等しく、MがNに等しくないときは從つてOはNに等しくない(Cesare)。またMが凡てのNに等しく、MがOに等しくないとき、NはOに等しくない(Camestra)。また、MがNに屬せず、

或るOに屬するならばNは必ず或るOに屬しない（Festino）。またMが凡てのNに屬するが、しかしそれが或るOに屬しないときにはNは或るOに屬しない（Baroco）。

推論の第三型は次の如くである。一つの同一の概念に、他の二つの概念の一つが全く屬し、他の概念が全く屬しないような場合、或は二つの概念の兩方ともが全く屬するか、全く屬しないような場合にその推論は第三の型であるといわれる。この場合中間概念とはそれについて二つの賓辭が賓辭づけられるところのものを意味する。二つの概念の中大名辭はこの中間概念から遠いものであり、小名辭とはそれに近いものをいうのである（「分析論前書」二八a一〇―一四）。例えば凡てのSがPであり、凡てのSがRであるならば或るRはPである（Darapti）。またRが凡てのSに屬し、PがSに屬しないならばPは或るRに屬しない（Felapton）。Rが凡てのSに屬し、Pが或るSに屬するならばPは或るRに屬さねばならぬ（Disamis）。Rが或るSに屬しPが凡てのSに屬するならばPは或るRに屬さねばならぬ（Datisi）。Rは凡てのSに屬するが、Pは或るSに屬しないならばPは或るRに屬さないことになる（Bocardo）。PがSに全く屬せず、Rが或るSに屬するならばPは或るRに屬さないであろう（Ferison）。

推論の型についての以上の三つの區別はマイエルの論ずるように、[1] 中間概念が他の二つの概念に對してもつところの概念的廣さの關係からなされたものである。第一型に於ては中間概念は他の二つの概念の間にあり、第二型に於ては中間概念は他の二つの概念の上にあり、第三型に於てはその中にあつて中間概念の廣さが恰も他の二の概念のそれと同一となつているのである。さらに分りやすくいえば第一型に於ては二つの概念が中間概念によつて結びつけられているが、第二型に於ては中間概念が二つの概念の外にあり、第三型は中間概念に於いて二つの概念が自ら結びついていると考えるものである。この點から見ても推論式が如何に中間概念を核心として動いているかが分かるであろう。種々なる推論の仕方は中間概念のあり方とその働き方とによつて規定せられているからである。

以上の三型のうち、正當にして確實なるものは第一の推論であり、他の二つのものも若しそれらが推論の正しさを

得ようとするならば第一型に歸らねばならぬであろう。アリストテレスも「分析論前書」第四節の終りに(二六b三〇)「第一型の推論は完全である、凡ての結論はこの型の推論によつて證明せられる」といつている。蓋し第一型の推論はオリジナルに措定せられた前提から出發するのみでなく、二つの概念が中間概念によつて媒介せられているからである。第三型は中間概念に於いて媒介せられると思はれるのみであり、第二型はそれを外にして二つの概念が結合せんと思うのみであるが、第一型に於ては中間概念を媒介として二つのものが實際に結合せられているからである。

ロッスはこの三型の關係を次のようにも述べている。(二)第一型に於ては中間概念は小概念によつて賓辭づけられ(即ち結論の主辭となる)中間概念によつて賓辭づけられた大概念をもつ(即ち中間概念が大概念の賓辭となる)のであるが、第二型に於ては中間概念は二つの(大小の)概念によつて賓辭づけられ、第三型に於ては中間概念は二つの概念の主辭となつていると。その意味は大體に於て上述の區別と同樣であるであろう。ロッスはそれにつずいて、これらの三つの型の外に第四型の推論が何故にアリストテレスによつて考えられなかつたかという疑問を發している。第四型とは第一型の反對であつて、中間概念が大概念によつて賓辭づけられ、それによつて賓辭づけられた小概念をもつような推論である。ロッスはこの問題を自問自答していう。それは恐らくアリストテレスのこの三の區別は單に中間概念の可能的位置を形式的に考察することから起つたのではなく、人間の思惟の自然的な進み方から考察されたものであり、實際ものを考えるときは我々は決して第四のような型に於て考えないからであろうと。我々は第二及び第三型に於ても既に一種の不自然さを見出す。第二型に於ては二つの概念の一つが主辭とならず賓辭となつており、第三型では、二つの概念の一つが賓辭の代りに主辭となつているからである。第四型があるとしてもその結論は全く不自然なものとならざるを得ないであろう。

## 二

次に問題となるのは、アリストテレスは推論についてこの三型の區別を、如何なる原理によつてなし遂げたのであるかということである。第一型の推論は dictum de omni et nullo に據つていることは明かであるが、第二、第三型の推論の妥當性は次の三つの原理によつているとゝわなければならない。

一、轉換（ἀντιστρέφειν）。例えば Cesare は大前提の單なる轉換によつて得られたものである、No P is M, All S is M からして No M is P, All S is M となり、そこから直接に No S is P という結果が得られる。また Camestra は小前提の轉換によつて作られる、All P is M, No S is M とゝう推論が No M is S, All P is M となり、そこからして No P is S が生じ、又は No S is P が結果する。廣ゝ意味に於て、轉換とは概念の轉置によつて前提が轉換せられることである。それは時として主辭と賓辭との轉換でもあり、肯定と否定との轉換の場合もあり、全體が特稱に置き換えられることによつて新しい型の生ずることもある。アリストテレスは判斷については轉換を考えなかつたが、推論については大に之を重じた。推論の樣相（Modus）を論ずるときに轉換が重要なる原理となるのであるが、ここでは特に第二、第三型の推論を作り上げる原理として狹ゝ意味に用いられているのである。

二、reductio ad impossibile. アリストテレスは第二第三型の推論を作成するとき、多くは轉換法を用いたが、屢、この reductio ad impossibile をその補助とした。殊に第二型の Baroco や第三型の Bocardo では專らこの方法によつて構成せんとしている。彼はそれを「假定からの推論」（συλλογισμὸς ἐξ ὑποθέσεως）の一つの形と名づけている。蓋しこの方法は一つの臆說を立ててそこから何ものかが結果するか、またはその臆說からして如何なるものも結果し得ないことを證明せんとするものであるからである。例えば Baroco（All P is M, Some S is not M, therefore Some S is not P）に於て凡てのSがPであると假定せよ、然らば凡てのPはMであり、凡てのSがMであるべきであるが、しかるに我々は或るSはMでないことを知るが故に、凡てのSがPであるということは不可能でなければならぬ。そのように一つの假定を設けそれから出てくる結論が不可能であることを證明することによつて一つ

の推論を構成せんとするのである。

三、Ekthesis (ἔκθεσις). これは ἐκτίθεσθαι または ἐκτεθεῖσθαι という動詞からきたもので、もとは空間的關係を意味する。例えば一つの直線を圓の外に置くという場合のように。プラトンはイデアを個々の感覺的なるものから引きはなし、その外に置くことをエクテシスと考えた。このときイデアを分離すると共に、それを超越的な存在として打ち立てることをもそれは意味していた。アリストテレスでは例えば「詭辯論」二二章一七九a三行に、τοιόνδε ἐκτίθεσθαι とあるように、一つの事物をそのものとして取り出すことを意味している。そこからして次に二つの事物を互に區別してそれらの各々に鋭い注意を向けること、さらにはそれを學問的に規定し、認識にまでもたらすことを意味するようになつた。最後にそれは何かの説明のために多くの材料から特にそれをとりだして讀者の理解に便ならしめること、即ち、「例をあげる」「例證する」意味にも使われている。「トピカ」に於て人間を一例としてあげるとき ἐκκειμένου ἀνθρώπου という（一〇三b二九）。「分析論前書」では ἔκθεσις τῶν ὅρων のように推論の形式を證明するために、多くの概念を特に選んでとりだすことに屢〻用いられた。我々の今問題となつている點からいえば、推論の第二型に於て、必然的にして肯定的な大前提と實質的にして否定的な小前提との結合によつては決して必然的判斷が結果し得ないことを證明するために概念のエクテシス（ὅρους ἐκθείσεις）又はホロスによつて證明せられるといふほどの意味であろう（「前書」三〇b三一）。それは經驗的取捨によつてではなく、概念のもつ必然性によつて證明せんとするのである。時としては推論の形式を「例」によつて證明する場合にも ὅρους ἐκθείσεις ἀναγκαῖον δεῖξαι といわれるから、いわば直觀的な必然性によつて推論の必然性を認證せんとするものである。

とはいうもののアリストテレスは必ずしも推論の進行を例證によつて基礎づけようとしたのではない。印度の論理學に於ては「喩」というものが一つの要素をなしているがエクテシスとはその意味に於ての例證をさしているのでは

ない。たとえそこに經驗的な實例がもち出されることがあつても、アリストテレスの着目するところは常に概念の論理的一般性についてであつた。エクテシスは經驗的な實例をも一般化する作用である。却つて一定の概念には一般的な記號が代置せられ、それが他の概念に對して有する關係もこのような一般的記號の關係として表わされるところにアリストテレスの論理が後に專ら形式的に發展せらるべき萌芽があつたわけである。近時ルカシエウィツ(三)などは殊にこの點を强調して、アリストテレスの論理を記號論理として解釋せんと試みている。有名なる推論式、――凡ての人間は可死的である、ソクラテスは人間である、それ故にソクラテスは死なねばならないという推論はセクスツス・エムピリコスによつてペリパテティクな論理と名づけられているが、それは必ずしもアリストテレスの論理ではなかつた。ソクラテスは人間であるという小前提は單稱命題であるが、アリストテレスは單稱的名辭又は前提を彼の體系の中に導入しはしなかつた。彼の試みたのは若しAが凡てのBによつて賓辭づけられ、そしてBが凡てのCによつて賓辭づけられるならば、そのときAは凡てのCによつて賓辭づけられるという事實的關係を表明したにすぎない。從つて第二にアリストテレスは必ずしも「それ故に」(ἄρα)という推理を施設したのではなく、ただ前提を前件として、結論を後件とする內包の關係を明にしたまでであるという。この解釋は現代の記號論理學の立場に立つてアリストテレスの論理を新しく把握しようと試みたものであつて、果してそれが彼の眞意であつたかどうかは問題であるが、第一の點、卽ちアリストテレスの推論は必しも個々の經驗についてではなく、概念の一般的關係を規定せんとしたものであるということは十分に認められてよいであろう。

エクテシスというのも以上の意味に於て命題の一般妥當性を直觀せしめ、概念（ホロス）と概念結合又は非結合を直觀的に知らしむるものである。殊に此場合エクテシスが云爲せられるのは極めて限られたる範圍に於てであつた。推論の第一型に於ては概念關係の合理的直觀が直接にそして容易にもたれるのであるが、第三型に於ては概念が部分的であるから、そのような部分概念に於て二つの極概念が如何に結びつくかということが容易に判明しない。實例で

もつていえば、凡てのCがAである、凡てのCがBであるという二の前提から、第一型ならば直接にAとBとの結合が容易に結論されるのであるが、第三型に於てはこの結合をCの部分概念に於て見出そうとするのであるから、或るAはBであるということが成立しなければならぬ(Darapti)。しかしこのような特殊なAがBであるということは如何にして推理せられ得るか。AとBとを結合する中間概念はCであるが、或るAはこのCと同一であり得るか。それが同一であることを證するには特殊な直觀を要するのであつて、單に二つの前提からして直接に結論し得られないのである。この場合我々はエクテシスに依らねばならぬのであつて、一般にそれは部分概念に關して推論すべき場合は有効となるものであつた。Darapti を實例でもつて示せば、凡ての人間は動物である、凡ての人間は精神をもつている、それ故に或る動物は精神をもつているとなるが、然らば精神をもたない動物があるのであるか。第三型の推論はこのような點に於て嚴密なる推論をなすことができない。エクテシスは最も直觀的ではあるが、同時に最も非論理的な推論の仕方であるといわねばなるまい。それだからしてテオフラストスは後にエクテシスによる推論法を全く捨て去つたと傳えられている。

## 三

アリストテレスは以上の如く推論について三つの型を區別したが、最も完全にして確實なるものは勿論その第一型であるのみならず、凡ての推論は結局はそれに歸すべきものと考えたようである。むしろこの第一型の萬能をおさえるためにエクテシス等の方法を用いたとも見られるが、それはロッスも指摘するようにプラトンからの傳統によるのであろう。アリストテレスの志すところは新しい學問的方法を見出すべき途上に於て推論を研究することにあつた。學問とは彼にとつては事物を、それが何故にそのようにあるかという點からして知らんとするものであるべきであつた。そうしてそれを我々に教えるものは偏に第一型の推論でありその外にはなかつたのである。第二型をとつて見

よ。一つの根本的性質をもつているものは或る屬性をもつていない、或る事物はこの屬性をもつている、それ故にその事物はその根本的性質をもつていないと結論する。しかしその事物が根本的性質をもつていないのは、それがそのような屬性をもつているからしてではない。前提はこの場合、結論の單なる認識理由ではあつても存在根據とはなり得ないのである。また第三型をとつて見よ。凡ての事物は或る根本的性質を有しながら或る屬性をもちそしてまた或る他の屬性をも有つている、そこからして或る事物は第二の屬性をもちながらまた第一の屬性をも有つていることを結論しようとする。しかしながら或事物が二つの屬性の各々をもつということはこれらの屬性が互に共存的であるか否かを示すものではない。二つの屬性が一つの事物に於て果して一致するかどうかの理由を我々はどこにも見出すことができない。それを示すものは經驗又は直觀であつて、さてこそエクテンスのような方法が必要となつてくるのである。そこでは高々一つの屬性から他の屬性を知る認識根據が示されるにすぎぬ。眞に事物の存在理由を與えるものは第一型の推論のみであつた。しかし嚴密にいうと第一型推論でもその凡てが存在理由を與え得るとはいえない。凡ての事物は或る屬性をもつておれば一つの根本的性質をもつていなければならない、或る事物はこの屬性をもつている、それ故にその事物は根本的性質をもつていると結論する。しかしこの推論は單に事物のそのようにあることを示すものであつて何故にそれがそうなければならぬかを明かにするものではなかつた。むしろ證明せらるべきは大前提そのものであつて其他は不必要となるであろう。

それであるから推論は次の如く改められねばならぬ。凡ての事物は或る根本的性質をもつている、それ故にその事物は或る屬性をもつていなければならない。或る事物はその根本的性質をもつていれば從つて或る屬性をもつていなければならないと。推論がこのような形をとつたときに初めて我々はその事物が或る屬性をもつということのみでなく、何故にそれをもつかという理由をも知ることができるのである。

第二第三型の推論は單に一つの事物から他の事物を知る手段を與えるのみであるが、第一型の推論は事物のそのよ

うにあることを、さらには何故にそのようにあるかという理由を我々に教える、即ち事實を見出すのみでなく、説明することもできるのである。

ロッスはさらに第一型の推論が他の二つの型に比して優位を占むることの理由を、人間の思考の自然さに於て求めている。(四) 前提に於て主辭であるものが、結論に於て主辭となり、前提に於て賓辭であるものが結論に於ても賓辭であるのは人間の思惟にとつて極めて自然的であろう。そしてそのようなことが可能なのは第一型の推論に於てのみであつた。第二型に於ては前提の主辭であるPとSの孰れか一つが結論に於ては却つて賓辭となつてしまう。さらに悪いことには、二つの主辭の孰れが結論に於て無理のない賓辭となり得るかを定めるものが前提の中に見出されないのである。第三型に於ては前提の二つの賓辭SとPとの孰れか一つが結論に於ては主辭とならなければならない。しかるにその孰れが主辭となるべきかの理由がそこにも不明である。そのようなことは人間の思考にとつて極めて不自然であることはいうまでもない。最も自然的であるのは第一型の推論でありそれ故にそれが特に推論の代表的なものと考えられるのである。

しかしながら凡ての推論を第一型に歸入せしむることは果して如何いうことになるであろうか。或る論理學者はアリストテレスの推論法は何ものをも證明せず、また妥當なる推論をなしとげることができない、それは要するに一種の循環論(petitio principii)にすぎないという。蓋し循環論の本質は二つの前提の孰れかは、結論が既に知られていなければ知られることができないという點にあるのであるが、アリストテレスの推論はまさにそのような性格をもつているからである。そこでは大前提又は小前提が既に結論を豫想している、人間は死すべきであるという大前提は私が死ぬという事實なしにはなり立たない。然るに私が死ぬということは將に求めんとする結論である。將に求めんとするものを既に豫想するのは petitio principii に非ずして何であるか。アリストテレスの推論法は大前提からして結論を推論せんとしながら既に結論を大前提の前に豫想している、それでは何ものをも推論したとはいえず、たとえ

それが可能であつても推論する必要はなくなるであろう。

また小前提について見ても、私が人間であるというのは單にそのようにある私を敍述したまでであつて、私は死すべきであるという結論なしには何の意味もないものとなろう。私が人間であるという言說は死すべき人間である意味に於て大前提ともつながり、推論の體系に於て意味をもつことができる。從つて小前提も亦結論を豫想しているといわねばならぬであろう。さらに論議を遲しくしていえば、大前提は小前提にも依存している。人間は可死的であるというのは人間であるソクラテスに依存している、そういう人間が存在しなければ大前提はなり立たぬであろう。嚴密にいえば人間であるソクラテスは死すべき人間であるソクラテスであるが、果してそうならば大前提は結論と小前提とを共に豫想することになり、推論は何ものをも論出せず、單に大前提の三概念を分析し、又は展開するにすぎないことになるであろう。

この問題は大前提の性格とその必然性に關するもので、既に古くは Sextus Empiricus によつて論難せられたものであるが、(五) 我々はアリストテレスの立場に立つて、先ず次のように辯駁することができるであろう。大前提は勿論一般的であり必然的でもなければならぬが、それらが單に經驗によつて得られ、または得らるべきものであるならば或は論者のいう如く既に結論を豫想していることになるであろう。しかしアリストテレスにとつて推論の前提となるものは必ずしも盡く經驗の上に基いてはいなかつた。經驗的事實の枚擧によつて得られる一般性は歸納法によるが、Induction はソクラテスの方法ではあつても必ずしもアリストテレスの學問方法ではなかつた。また假令それが歸納法によつて得られるにしてもその意味の Induction は決して枚擧的なものでなかつた。歸納法が推論に於てもつ意義については後に論ぜられるであろう。

次に推論の前提は單なる言葉の定義でもない。人間が死すべきであるというのは單なる人間の定義ではない。それはいわばアプリオリにであり、しかも綜合的である。勿論アリストテレスはこの點について何らの辯明をも試みては

いないのであるがロッスも明晰に論じたように、[六] generic universal と enumerative universal とは明かに區別せられねばならぬ。一般的眞理は一つの事實によつても十分に確證せられ得るのであつて必ずしも經驗的事實を凡てに亘つて枚擧する必要はないはずである。三角形の内角の和が二直角であることは必ずしも凡ゆる三角形について實證せらるることなしにも確實にして眞であることを妨たげない。そのような一般的知識は個々の知識なしにも十分に得られるのである（「前書」六七a一九）。アリストテレスはそれを論ずるときにプラトンのアナムネシス説に關説している。彼にも亦そういう確信が土臺となつていたのであろう。

さらにCがBであるというためにはCがBの凡ての屬性をもつていなければならぬ。死ぬということが人間の屬性であることを知るためにはそれが私の一つの性質であるばかりでなく、凡ての人間の屬性であることを我々は知つていなければならない。そういうことは如何にして可能であるかという疑問に對してもアリストテレスは次の如く答えるであろう。屬性にも種々あつて單に偶然的なものと本質的なものとがある。私が色白いというのは單に附帶的な屬性であるが、私が可死的であるというのは本質的な性質であるから從つて人間一般の性質でもなければならない。推論はそのような本質的關係を取り扱うものであつて必ずしも個々の屬性について云爲するものではない。このことは後に彼の「形而上學」に於て重大なる問題となるのであるが、推論についてもそういう見方が彼の全體の立場を支配していたことに注意せられねばならぬであろう。

しかし若しそうならば、推論とは要するに大前提の中に凡てが完備せられていて、煩しき手續きをとつて結論というものを引出す必要がなくなるのではないか。凡ての人間が死すべきであるならばその一人である私が死なねばならぬことは自明の理であつて、何も推論のような形式をとらずとも分りきつたことではないか。むしろ學問の仕事は大前提が如何にして確立せられ得るかという點にあつて、推論というが如きは無用の長物にすぎぬのではないか。

この疑問に對してもアリストテレスに代つてロッスは次のように答えている。我々の知識には可能的なるものと現

實的知識との區別がある、一つの知識は我々によく知られていても（bekannt）、十分に且つ確かに知られている（erkannt）とはいえない。前提は可能的な知識であつても現實的な知識ではない。結論に至つて始めて我々は現實的に知つたと云い得るのである。我々は前提を知ることに於いて單に可能的にしか知つてはいない。或ものを可能的に知るというのは、それを現實に知つていることではない、ただの條件が與えられてそれを知らんとする方向にすすむべき狀態にあるというまでである。可能的なものから現實的知識にうつるために必要な、さらなる條件は、前提が互に如何なる關係にあるかを見ることである。「二つの前提が互に如何なる關係にあるかを見ることなしには、人はその結論を知らぬであらう（「前書」六七a三六―七）。二つの前提がその結論を含んでいても前提についての知識は必ずしも結論の知識を豫想してはいない。結論について知ることは一つの新しい或ものに進展することであり、前提とは何らか異つた一つのものに（ἑτερόν τι τῶν κειμένων）到達することでなければならぬ。前提のうちに含まれてはいるが未だ明かになつていないものをあらわなる知識にもたらすことであり、單に可能的なものを現實的知識にまで成長せしめる作用でなければならない（「前書」二四b一九）。推論はこの意味に於て單に空しき手續きでもなくまた無用なる操作でもなく、必要にして効果的なる知識の運用であるといわなければならない。

もし以上のように見ることが許されるならば推論の性格と意義とを救うことができるのみでなく、それはアリストテレスの論理も亦彼の形而上學なしにはその據所を失うことを明かにする所以となるであろう。彼の論理は單に思惟の形式を論ずるものでなく、如何なる思惟も常に存在についての思惟であることを忘れなかつたアリストテレスであることを我々はここに見るのである。彼が論理學をつまりは形而上學の一の部門として誰よりも強く意識していたことはこの點からしても既に明かであるが尚このことについては詳述せらるべき場所を我々は後にもつであらう。

## 四

アリストテレスは「分析論前書」に於て必然的な前提とは何を意味するかを規定してはいない。そこでは唯それと單なる事實を記述した前提との區別を自明的なものとして取り扱つている。しかし若し推論が前提から結論を引き出すべきものであるとするならばその前提は必然的でなければならぬ。推論に於て必然性の問題は極めて重要であり、前提から結論の生ずる過程が必然的でなければならぬことは勿論、この必然的推論の前提となるべきものがそれ自ら必然的であることなしにはこのような必然的推論の可能性は望まれないであろう。必然的な事實と單なる事實との區別は如何にして立てらるべきであるか。この問題は「前書」に於て十分取扱われていないが、そこからして推論の樣相（Modus）ということが當面の問題となつて來るのである。

樣相の問題は推論についてよりもむしろ判斷に關する問題であるが、ここでは次の諸點について注意せらるべきである。第一型の推論についていえば、大前提が必然的であり小前提が事實的であるならばその結論は必然的であるが、これに反し單なる肯定的大前提と必然的小前提との結合からしては必然的な結論を得ることができない。

しかるにアレキサンドロスによればエウデモス及びテオフラストスの一派はこれと異つた意見をもつていたという。即ち二の前提の中どちらか一つが事實的であるならば結論もそうでなければならぬ。恰もその一つが否定的であれば結論も否定的であり、一つの前提が特稱的であれば結論もそうであるように。一言にしていえば結論は常に劣位の前提と同樣でなければならぬというのである。例えば凡ての人間は必然的に動物である、そして時として動くところの凡てのものは人間であつた。しかしそれ故に動くところの凡てのものが動物でなければならぬという結論は出て來ないであろう。この場合大前提は必然的であるが小前提は必然的でない、從つて結論は小前提と同樣に必然性をもつことができないというのである。しかしこれはアレキサンドロスも指摘しているように、アリストテレスの原則を敗るものではない。動くところの凡てのものが人間であるということが果して小前提として成立し得るか否かが問題であるからである。この例はむしろ次の如く書き改めらるべきであろう。凡ての生物には事實的に運動が屬する、凡

ての人間は必然的に生物である、それ故に凡ての人間には事實的に運動が屬する。即ち大前提が事實的であり小前提が必然的であれば結論は事實的であつて必然的ではあり得ないのである。

次に特稱的推論についても、大前提が必然的であれば結論も亦必然的でなければならぬ。大前提が事實的であれば結論も亦事實となるであろう、これに反して必然的なる大前提と事實的なる小前提との結合からして必然的な結論が得られることは apagogisch な操作によつて證明せられるのである。アパゴーゲー（ἀπαγωγή）とは deductio ad absurdum であつて、一つの假定をつくりそれがやがて不合理に導くところからしてその推論の不可能なることを證明せんとするもの（ὁ εἰς τὸ ἀδύνατον διὰ τοῦ ἀδυνάτου συλλογισμός）である。此場合についていえば若し或るCがAでないとすれば（凡てのCがAであるという結論の反對）凡てのCは事實的にBであるから或るBはAでないことにならねばならぬ、これは明かに凡てのBが必然的にAであるという大前提に矛盾するからである。アパゴーゲーに對するものは deiktische Syllogismus であつて、それは二つの眞なる前提から直接に證明せんとする命題を引き出すものである。これに反して、まさに拒絶せんとする命題を前提としてそれを押しすすめてゆけば不合理につきあたることを證明することによつてその前提を廢棄せんとするのがアパゴーゲーである。この二つの方法はアリストテレスが屢〻證明に用いた有力な方法であつた。それは假定的推論の一種であるが、ἀπαγωγή は ἀπο+ἄγω であり、ἐπί+ἄγω 即ち ἐπαγωγή（歸納法）と對照して我々の注意をひくものがあるであろう。エパゴーゲーは個々のものから一般者を引き出さんとするものであるから積極的な目的をもつているが、アパゴーゲーはその假定（前提）を廢棄せんとする消極的な目的に始終している。從つてそれは何ものかを論證するよりもむしろ一つの推論の必然性を明かならしめる補助的な役目をしかもつていない。アパゴーゲー的な推論は、それ自ら獨立したものであるよりももとも と推論の必然性を證明せんとするものであるから、アリストテレスは「後書」八七 a 二〇—二五に於ては之を推論とは見做していない。推論というよりもむしろ推論の論據（必然性）を明かにするものであり、推論の推論ともいわる

べきものであろう。

（未完）

註（一） H. Maier, Die Syllogistik des Aristoteles. Teil II, Hälfte 1. S.51.

（二） Ross, Aristotle's Prior and Posterior Analytics. Introduction. p.34.

（三） Lukasiewicz, Aristotle's Syllogistic.

（四） Ross, op. cit. p.34.

（五） Sextus Empiricus, Pyrrh. Hypot. 195-203.

（六） Ross, op. cit. p.38.

（筆者 京都大學名譽教授〔文學部、哲學〕
京都學藝大學學長、文學博士）